

5

体調管理について

5-1 痩せすぎ、太りすぎにしないために

●犬や猫を健康に育てるためには、私たちと同じように、痩せすぎ・太りすぎは、よくありません。

大きくなるのがイヤだといって、成長のために多くのカロリーを必要とする子犬や子猫に与える量を制限したり、喜ぶからといってフードを与えすぎたり、おやつは“別腹”などと思っていないでしょうか？

給与量の設定方法

カロリーの必要量はライフステージや体重によって異なります。犬や猫が1日に必要なカロリー量は体重によって変化します。また、同じ体重の犬や猫でも、ステージによって必要なカロリー量は変化します。

多くの市販のフードには、カロリー表示とともに、与える量の目安が示されています。しかし、同じ量のご飯を食べても太らない人や太ってしまう人がいるように、犬や猫も個体によって必要なカロリー量が違う場合があります。

目安だけに頼らず、散歩等の運動量、体調などを良く観察して与える量を調節しましょう。

memo カロリー必要量の計算法

犬の場合には、体重(kg)の0.75乗に各ステージにおける係数(離乳期では274、成長中期では200、成犬期では132)をかけることで計算します(PCをお持ちの方はエクセルで「=係数×体重^0.75」で計算できます)。
猫の場合には、体重(kg)に係数(10週齢では250、20週齢では130、30週齢では100、40週齢や50週齢で活発な個体では80、40週齢や50週齢で不活発な個体では70)をかけることで計算できます。

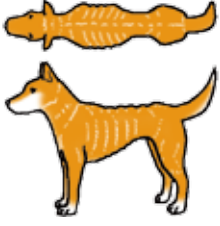
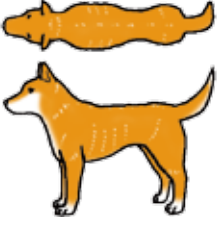
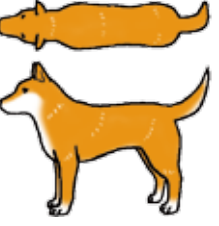
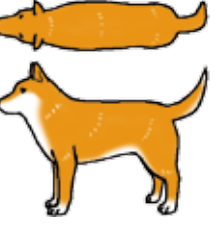
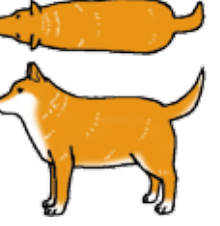
犬のカロリー必要量(kcal/日、参考値)

体重(kg)	離乳期	成犬中期	成犬
1	274		
2	461		
3	625		
4	775		
5	916	669	441
10	1,541	1,125	742
15	2,088	1,524	1,006
20	2,591	1,891	1,248
25	3,063	2,236	1,476
30	3,512	2,564	1,692
35	3,943	2,878	1,899
40	4,358	3,181	2,100
45		3,475	2,293
50		3,761	2,482
55		4,039	2,666
60		4,312	2,846
65		4,578	3,022
70		4,840	3,194
75		5,097	3,364
80		5,350	3,531
85		5,599	3,695
90		5,844	3,857

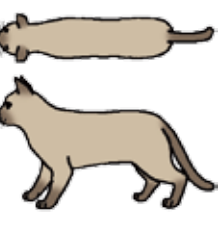
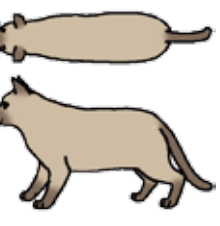
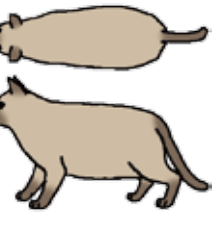
猫のカロリー必要量(kcal/日、参考値)

体重(kg)	10週齢	20週齢	30週齢	40週齢	50週齢以上	
					不活発	活発
0.8	200					
0.9	225					
1.0	250					
1.1	275					
1.2	300					
1.3	325	169				
1.4	350	182				
1.5	375	195				
1.6	400	208				
1.7	425	221				
1.8	450	234				
1.9	475	247	190			
2.0	500	260	200			
2.2		286	220			
2.4		312	240			
2.6		338	260	208	182	208
2.8		364	280	224	196	224
3.0		390	300	240	210	240
3.5		455	350	280	245	280
4.0		520	400	320	280	320
4.5		585	450	360	315	360
5.0		650	500	400	350	400

犬のボディコンディションスコア（BCS）と体型

				
BCS1 痩せ	BCS2 やや痩せ	BCS3 理想的	BCS4 やや肥満	BCS5 肥満
肋骨、腰椎、骨盤が外から容易に見える。触っても脂肪が分からない。腰のくびれと腹部の吊り上がりが顕著。	肋骨が容易に触る。上から見て腰のくびれは顕著で、腹部の吊り上がりも明瞭。	過剰な脂肪の沈着なしに、肋骨が触れる。上から見て肋骨の後ろに腰のくびれが見られる。横から見て腹部の吊り上がりが見られる。	脂肪の沈着はやや多いが、肋骨は触れる。上から見て腰のくびれは見られるが、顕著ではない。腹部の吊り上がりはやや見られる。	厚い脂肪におおわれて肋骨が容易に触れない。腰椎や尾根部にも脂肪が沈着。腰のくびれはないか、ほとんど見られない。腹部の吊り上がりは見られないか、むしろ垂れ下がっている。

猫のボディコンディションスコア（BCS）と体型

				
BCS1 痩せ	BCS2 やや痩せ	BCS3 理想的	BCS4 やや肥満	BCS5 肥満
肋骨、腰椎、骨盤が外から容易に見える。首が細く、上から見て腰が深くくびれている。横から見て腹部の吊り上がりは顕著。脇腹のひだには脂肪がないか、ひだ自体がない。	背骨と肋骨が容易に触る。上から見て腰のくびれは最小。横から見て腹部の吊り上がりはわずか。	肋骨は触れるが、見ることはできない。上から見て肋骨の後ろに腰のくびれがわずかに見られる。横から見て腹部の吊り上がり、脇腹にひだがある。	肋骨の上に脂肪がわずかに沈着するが、肋骨は容易に触れる。横から見て腹部の吊り上がりはやや丸くなり、脇腹は窪んでいる。脇腹のひだは適量の脂肪で垂れ下がり、歩くと揺れるのに気づく。	肋骨や背骨は厚い脂肪におおわれて容易に触れない。横から見て腹部の吊り上がりは丸く、上から見て腰のくびれはほとんど見られない。脇腹のひだが目立ち、歩くと盛んに揺れる。

肥満をふせぐには、おやつやごほうびはできるだけ控える、適度な運動をさせるなどの注意が必要です。

おやつやごほうびを与えることは、犬や猫とのコミュニケーションをとるひとつの手段ですが、カロリー表示を確かめて、これらを与えた分だけフードを減らすなどの注意が必要です。

本格的なダイエットは、獣医師の指導の下で行う必要がありますが、軽度～中度の肥満の場合には、与えるフードの量を通常の30～40%減らして体重の変化をチェックします。1週間で体重が1～3%減るくらいの割合で徐々に体重を減らしていくのが適当です。この際、空腹感を抑えるために、1日量を3～4回に分けて与えます。（与えるフードの量を40%以上減らすといった急激なダイエットは体に悪い影響を与える危険があります。）



5-2 日頃の体調管理

●日頃から犬や猫の体調をよく観察することが大事です。

犬や猫は、体調が悪いときでも、言葉であなたに伝えることができません。でも、日常の行動をよく観察しておくことで、病気の前兆を知ることが出来ますし、早目に獣医師に診てもらうことで、病状の悪化を防ぐことができます。また、かかりつけの獣医師の電話番号をメモしておくで安心です。

犬で注意する点は…

- 食欲がない
(正常な犬でもフードを1～2日間食べない個体もありますが、積極的に食べない場合には病気の前兆と考えて良いでしょう。)
- 毛にツヤがない、ゴワゴワしている
- 糞の中に粘液や血が混じっている
- いつもより糞が臭い
- おしっこに血が混じっている
- 数日間にわたって嘔吐をくりかえす
- お腹が膨れていて、触ると痛がる
- 咳がひどい
- 鼻汁や涙を流す
- 熱がある(犬の正常体温は38.0～39.0℃です)
- 周りの状況に無関心になった
- 暗がりやに隠れて出てこない



猫で注意する点は…

- 食欲がない
- 目に活力がない
- 毛が乾燥し、ゴワゴワしている
- 休みなく鳴いている
- 体に触られるのを嫌がる
- 水を飲む量がいつもより異常に多い(少ない)
- おしっこの回数がいつもより多い
- おしっこをチビチビもらす
- おしっこに血が混じっている
- 下痢をくりかえす
- 熱がある(猫の正常体温は38.0～39.0℃です)
- 1日以上、1ヶ所に隠れて出てこない
- 毛玉の排泄がひどい



5-3 こんなことにも気をつけましょう

観葉植物による中毒

食材ではありませんが、室内に置いてある観葉植物を犬や猫が誤って食べたことで中毒を起こすことがあります。ディヘンバキアやセローム（サトイモ科）、アイビー（セイヨウキヅタ、ウコギ科）、イチイ（イチイ科）、クレマチス（テッセン、キンポウゲ科）、スズラン（ユリ科）、クロッカス（アヤメ科）、シクラメン（サクラソウ科）など、犬や猫に潜在的な危険性を持つ植物は多いので注意が必要です。



セローム

アイビー

クレマチス

スズラン

クロッカス

シクラメン

家庭用の洗剤等

家庭にある洗剤、殺虫剤等についても適切に管理し、犬や猫の口に入らないよう注意することが大切です。



歯のケア

犬では生まれてから約1月で 28 本の乳歯がはえそろう、3～7月で 42 本の永久歯にはえかわります。また、猫では生まれてから約1月半で 26 本の乳歯がはえそろう、4～8月で 30 本の永久歯に生えかわります。

犬や猫が健全な歯を失うと、健康状態にも悪い影響を与えます。健全な歯を保つには、ドライフードなどを与えるのも効果的ですが、できるだけ、子犬や子猫の時から定期的な歯磨き（犬ではできれば毎日、猫では週1～2回）の習慣をつけましょう。歯磨きは、子供用の歯ブラシや、やわらかい布きれなどを使っておこないますが、最初は、獣医師の先生から正しい歯磨きの方法を指導してもらうと良いでしょう。また、定期的に獣医師の診察を受け、歯垢や歯石をとってもらうことも重要です。



飲み水にも注意を払いましょう

水は犬や猫の体の 60 ～ 80%を占める重要な要素です。

一般的に、健康な成犬や成猫が快適な温度条件下で暮らしている時の飲水量は、フードの乾物量（水分を除いた重量）の約 2.5 倍と言われています。実際には食べているフードの水分含量（例えば、犬用のドライフードの水分含量はおおよそ 10%、ウェットフードの水分含量はおおよそ 75%です）、気温、運動量などによっても大きく左右されますので、いつでも新鮮な水が飲めるようにしてください。

なお、人間用のミネラルウォーターは、マグネシウムなどのミネラルが多く含まれているものもあるため、犬や猫に与える場合は注意が必要です。



犬と猫が1日に必要な水分量（mL、フードから摂る水分を含む）

	体重 (kg)														
	2	3	4	5	6	7	8	9	10	15	20	25	30	35	40
犬	190	260	320	370	430	480	530	580	630	850	1060	1250	1440	1610	1780
猫	140	190	240	280	320	360	400	440	470						